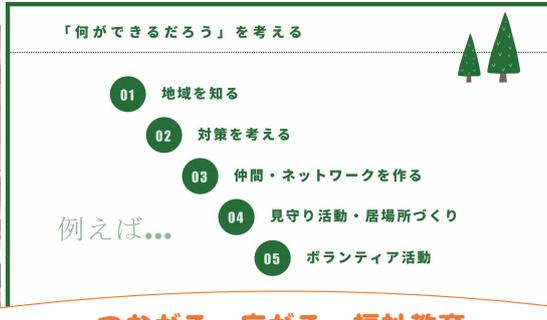


ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～ 福祉教育 わたしたちの実践

長崎県 雲仙市社会福祉協議会 事業企画課 係長 かきがわ ともかず
柿川 知一さん



【ボランティアを題材とした講話で子どもたちの自主性・公共性を高める】

雲仙市社会福祉協議会（以下、市社協）は現在、約20の小中学校で福祉教育を実践しています。「福祉とは、人が人を支えること」を分かりやすく伝える工夫が成果につながっています。

福祉教育への取り組みは年度初めのアンケートを各学校に送付するところからスタートします。アンケートでは、市社協が実施可能な福祉教育の内容を提示し、希望日程などを調査。そのうえで担当教員と対面し、学校側のねらいと、市社協から子どもたちに伝えたいことをすり合わせます。

ここでポイントとなるのは2点。ひとつは市社協で実践できるプログラムを一覧にし、視覚的に伝えること。もうひとつは、疑似体験を行う場合、その前に必ず講話の時間を設けてもら

うことです。柿川さんは、担当教員との打ち合わせで、例年通りのプログラムを希望する学校も、できれば新しい内容を行いたいと考えていると感じてきました。そのため、新しい情報を、相手がイメージしやすいように提示することを心がけています。

「疑似体験を行う学校が多いので、講話では、福祉とは何か？ 何のために疑似体験するのか？ といった目的・基本知識から話を始めます」と柿川さん。福祉とは人が人を支えることであり、支える側、支えられる側の関係が入れ替わる流動的なものだの説明します。そして、誰にでもできる身近な福祉としてボランティア活動を紹介します。「ボランティアというと無償性のイメージが先行しがちですが、本来は自主性こそが大切なんだよ、と子ども

たちに話しています」と柿川さんはいいます。

また、雲仙市の地域課題とその課題解決のためのアイデアなどを子どもたちに問う場面も。まずは地域課題を知り、社会のために自分がしたいと思うことを見つける。そのうえで疑似体験などに臨み、自分のすべきことが明確になる、という流れです。

福祉を我がごととして感じてもらえるよう工夫を凝らす市社協の福祉教育を体験し、地域のお祭りや福祉施設の運動会にボランティアとして参加する子どもが増えたそうです。「ひとりでも多くの子どもが、自分にできることを考え行動できるようになってくれたら」と語る柿川さんは、自身もそのために今できることを考え実践しています。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 地域デビューを応援する講座で住民がボランティアとして活躍するきっかけづくり
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア
- P.7 ▶ 「聴くこと、伝えること」を考える
- P.8 ▶ 地域支え合いセンターってどんなところ？ | インフォメーション

特集

地域デビューを応援する講座で 住民がボランティアとして活躍する きっかけづくり

地域住民がおのこの知識や技術等を活かし、地域の担い手として活動していくきっかけづくりとして、「地域デビュー講座」や「ボランティア入門講座」を実施している社会福祉協議会（以下、社協）があります。本特集では、そうした講座を実施している社協のなかからふたつの取り組みを紹介し、さまざまな住民がボランティアとして力を発揮していくプロセスをお伝えします。

事例
1

NPO との協同で農作業を通じた講座を開設 多様な住民の強みを活かせる社会参加の場をつくる

兵庫県 伊丹市社会福祉協議会



伊丹市社協 VC のみなさん（森田さん：右端、新開さん：右から2番め）

兵庫県南東部に位置する伊丹市は、大阪国際空港（伊丹空港）がある街として知られています。約 25km²というコンパクトな面積に約 19 万 5,000 人が暮らしおり、高齢化率は 26.3%です。大阪、神戸へのアクセスがいいことからベッドタウンでありながらも、野鳥があつまる公園があるなど豊かな自然もあります。

市内では、地域活動の担い手不足や高齢化により、現在は 100 以上ある地域ふれあい福祉サロンも減少が危惧されています。こうした地域生活課題に対して、伊丹市社会福祉協議会（以下、市社協）は、地域活動に参加するためのきっかけづくりに加え、さまざまな集いの場づくりが地域で推進されることをめざし、地域の方々や多様な活動主体と一緒に取り組みをすすめています。

伊丹市社会福祉協議会

ボランティア・市民活動センター センター長 もりた ひとみ 森田 仁美さん
ボランティアコーディネーター しんかい みり 新開 美莉さん

話しても話さなくてもいい 初心者から始められる作業の場

「何か活動をしたい」とさまざまな人が訪れる市社協ボランティア・市民活動センター（以下、市社協 VC）。ボランティアコーディネーターの悩みのひとつに、定年退職後の男性に紹介できる活躍の場の少なさがありました。

市内には、機械いじりの得意な人が集まり活動する「おもちゃの病院」など、特技や趣味を活かしたボランティア活動を行う団体がいくつもあります。しかし、そうした特技・趣味がない人には向きません。「特に定年退職後の男性は、既存のグループに入りにくいと考

える人が多く、おしゃべりの場へ行くこともなかなか気が向かないようです」と市社協 VC の森田さんは話します。

そこで市社協 VC が思いついたのが、農作業でした。農作業であれば、水やりや収穫、除草など多種の作業があり、初心者でも、おしゃべりが好きでなくても参加できます。こうした条件が定年退職後の男性にぴったりなのではないかと考え、農作業を通じた地域デビュー応援講座を開催することにしました。

農作業をする障害福祉事業を行う NPO と協同して講座を開設

「農園を探すにあたって真っ先に思

い浮かんだのが、農業を行う障害福祉事業所でした」と森田さん。作業をともに行うことで障害理解も深まると考えました。ちょうどその頃、NPO 法人阪神・障害者人権ネットワークの事業所「じゃがいも」がボランティアを欲しているとのうわさを耳にしました。2023 年の春、市社協 VC が「じゃがいも」に声をかけると、とんとん拍子に話が進みました。

「じゃがいも」は生活介護事業所で、8 名ほどの利用者が農作業を中心に活動しています。栽培した野菜の販売時に利用者たちがうれしそうに人と関わる姿を見てきた生活支援員の原寛子さんは、人と関わる機会を農作業のなか

助成金情報

（公財）洲崎福祉財団 「令和 6 年度下期 一般助成(東日本)障害児・者(含む難病)に対する自立支援活動への助成」募集(2025 年 2 月 15 日締切)
障害児・者の自立と福祉向上を目的とした各種活動や障害児・者に対する自助・自立の支援事業を助成します。対象エリアは、東日本（愛知県・岐阜県・福井県以東）です。（詳細は「洲崎福祉財団」で検索）

でもつくりたいと考えていました。ボランティアに協力してもらえないか……市社協 VC に相談をもちかけようとしていた折に、声がかかったのです。「地域で、ともに生きていく」という「じゃがいも」の理念に合うと考えた原さんは、喜んで市社協 VC の誘いに乗りました。

背景の異なるさまざまな人たちが社会参加のきっかけとして応募

講座のプログラムも、「じゃがいも」とともに考えています。1回の講座は全8コマで、これまでに昨年度と今年度の2回開催しました。

今まで受講生として集まったメンバーは、定年退職後の男性が3名、ほかに、サロンやこども食堂を運営している女性たち、コミュニケーションに不安があるものの何かしてみたいという人たち、余暇時間に地域で活動したいという外国人たちなど、年齢も国籍も性別も異なりました。

市社協 VC では、近年「コミュニケーションが苦手な自分にもできることがあればしたい」という相談が増えているといいます。そうした来所者に対してもこの講座を紹介したところ、複数名が参加を決めました。

程よい距離感が自然体の交流や楽しさにつながる

講座では、全体でのオリエンテーションや交流会も行いますが、最も多くの時間を過ごすのは「じゃがいも」利用者との農作業です。

コミュニケーションが苦手だという受講生のひとは、「いろんな方と交流できるのが楽しくて、継続してここに来たい」と言うだけでなく、「ここでなくても、自分でも何かやってみたい」と希望を話すようになりました。

こうした変化は、農園での程よい距離感があるからです。農作業という活動では、障害のある人に対して積極的な声かけや援助をすべきというプレッシャーがありません。「受講生も『じゃがいも』利用者も無理のない、しんど

～地域デビュー応援講座～

農園サポーター養成講座

農作業を通して、色んな方と交流しませんか？

自然とふれあう

農作業を通して、障がいのある方との交流やボランティア活動を始めるきっかけづくりを目的とした講座です。ぜひ、ご参加ください！

	日時	内容	場所
(1)	10月29日(火) 10時～11時	◎オリエンテーション ・農作業についての連絡等	いたみいきき プラザ
(2)	11月5日(火)～ 12月11日(水) 14時～15時頃 ※上記期間中の火曜又は水曜で 最大6回の活動	◎農作業(水やり・種まき・収穫など)	じゃがいも所管農地 (荒牧南)
(3)	12月6日(金) 10時～12時頃	◎あそぼうよ！かくれ家農園カフェ (ボランティアグループ)見学 ※コーヒー代実費分100円	ライフール伊丹
(4)	12月12日(木) 13時～16時	◎収穫野菜で調理実習・交流会 ※材料費実費分徴収有	アイ愛センター

【対象者】主に定年退職後で、障がい者支援やボランティア活動に興味のある方等 定員8名(先着順)

【参加費】無料(ボランティア保険加入者は、保険代として500円必要。また、最終日の調理実習は別途実費あり。)

【申込締切】10月25日(金)

【参加方法】以下のお電話、もしくはメールにてお申込みください。
(年齢・名前・連絡先をお聞かせください。)

【申込・問い合わせ先】伊丹市ボランティア・市民活動センター
〒664-0014 伊丹市広畑3-1 いたみいききプラザ 1階
TEL: 072-780-1045 FAX: 072-777-0914
E-mail: volunteer@itami-shakyo.or.jp



▲秋にはじゃがいもやさつまいも、さといも等を収穫



▲声をかけあって作業する受講生と「じゃがいも」利用者

◀2024年度(第2回)の講座のチラシ

くないかたちであの場において、いい空間だなと思います」と森田さん。その場にいる全員が農作業を通じて自然体で交流できていることが、ボランティア活動の継続要因のひとつである「楽しさ」につながっています。

新しい自分に出会える ボランティア活動の継続にも

市社協 VC の新開さんは、コミュニケーションが苦手だという受講生と話すなかで、「今まで自分は虫が苦手だと思っていたけれど、苦手じゃないと気づいた」と言われ、この講座が新たな自分に気づける機会になっていると感じたといいます。

新たな自分に出会えるのは、受講生だけではありません。「ピーマン取るよ！」と周りに声をかけて畑をぐんぐん進む「じゃがいも」利用者の男性を見て、原さんは「いつもはここまで張り切っていない」とうれしそうに笑います。「作業を教える立場に立てる誇りを感じているんですね」と原さんが語るように、「じゃがいも」利用者たちも日頃の活動範囲を超えた「地域デビュー」を果たしています。

講座の受講から、継続的なボラン

ティア活動に発展した受講生もいます。「仕事の合間に地域で何かしたい」と市社協 VC へ相談に来たことがきっかけで、昨年度の講座に参加したベトナム出身の男性は、修了後も継続的に「じゃがいも」の農園にボランティアとして関わるようになりました。

NPO とのつながりを強化 多様な参加者のニーズを「収穫」

講座で顔の見える関係を築いた市社協と「じゃがいも」は、協力・連携を強めています。市社協がこども食堂の応援をしていると知った「じゃがいも」が野菜を寄付してくれたり、市社協が関わっている不登校の子どもが活動できる畑づくりの話し合いに「じゃがいも」に参画してもらったりと、ほかの事業でのつながりも生まれています。

当初のねらいとは異なり、多様な人が参加し、活動を楽しんでいるこの講座。「コミュニケーションが苦手とか、生きづらさを抱えているとか、そういった方々のニーズが多いという気づきにもなりました」と語る森田さんは、「そうした方々も含めて、それぞれの強みを活かせる社会参加の場をつくりたい」と今後を展望します。

(公財) 昭和田田記念財団 第44回学生論文「昭和田田賞」(2025年2月28日締切)

助成金情報

昭和田田記念財団では、学生の皆さんが自分の目で確かめ、自分の足で情報を収集し、自分の考えを示す、力強い論文、特に、実体験や独自の調査・実験に基づいて、自分自身の考えを発展させた、オリジナルで力強い論文の応募を歓迎します。(詳細は「昭和田田記念財団」で検索)

事例
2▶ 定年退職後の男性が「やりたいこと」を見つけられる連続講座
OBも大活躍し、人の輪が広がっていく

埼玉県・入間市社会福祉協議会

左から齋藤さん、
小寺さん

入間市は埼玉県南西部の県境にあり、人口約14万4,000人を擁する市です。工業製品や食品などの製造業、狭山茶などの農業が盛んなほか、東京のベッドタウンとしても機能しています。しかし人口は2010年頃をピークに減少傾向にあり、少子高齢化が進んできました。また市内中心地の入間市駅周辺と、郊外エリアとの地域格差も広がっています。そうした状況のなかで、入間市社会福祉協議会（以下、市社協）は、市から委託を受けた生活支援体制整備事業の一環で「いるまの男塾」を2019年に開始。生活支援コーディネーターが定年退職後の男性を地域とつなぎ、新たな生きがいを創出する事業を展開しています。

入間市社会福祉協議会

事務局長 齋藤 光明さん

地域福祉推進課 生活支援コーディネーター 小寺 惟さん

| 受講者OBと相談しながら
毎年のプログラムを作成

それまで仕事一筋だった男性が、定年退職後は地域との接点が希薄で、気がつけば孤独だった……こうした地域生活課題に対して、市社協は男性の地域デビューをサポートする「いるまの男塾」を開催しています。2019年度に開始し、今年度6期目を迎えました。

参加対象は男性市民限定で定員10名。告知は社協だよりや公式ホームページのほか、チラシを作成して配布、さらに第二層生活支援コーディネーター（以下、第二層SC）などから地域の人に直接声をかけてもらっています。今年度からは新たな取り組みとして、中高年の男性が多く集まるゴルフ場にもポスターを掲示してもらいました。

参加者の年齢制限は設けていませんが、想定どおりに定年退職後の60代後半～70代を中心に応募があります。全5回（1期目・2期目は6回）で構成される連続講座は、利き酒やコーヒーの淹れ方、少林寺拳法など、男性の興味を惹きつけそうなものばかり。毎年プログラムは変わりますが、どれも気軽に参加できる、バラエティに富んだ内容となっています。

プログラムの内容について、「毎年、『いるまの男塾』に参加された経験の

あるOBの人たち数名に集まってもらい、皆さんと相談しながら翌年度の内容を決めています。私は女性なので、男性がどのようなことに興味関心があるのかよくわからないことも多いので、大変助かっています」と語るのは、市社協 第一層生活支援コーディネーター（以下、第一層SC）の小寺さんです。

単に話を聞くだけの講座ではなく、ともに何かをつくるなどの体験型ワークショップとすることで、自然に参加者同士の会話が生まれる構成です。

| 講師やメンターにOBが大活躍
受講後も交流や活動を継続

企画だけでなく、会場設営といった運営面でも、また連続講座の講師としてもOBを起用していることは「いるまの男塾」の大きな特徴です。

「現在、コーヒーの淹れ方講座で講師をしてくださっている方は、3期目のときの受講者です。かつては世界中を飛び回ってコーヒー豆の買い付けを行う仕事に就かれていたそうで、『今まで仕事で身に付けた知識や経験を、何かの役に立てたいと思っていた』と快く講師を引き受けてくれました」と齋藤さんは語ります。

ふだんの講座は市社協の活動室で行いますが、コーヒーの淹れ方講座など

設備が必要な時は地元企業の施設を会場とすることも。市社協では公式ホームページに地域福祉応援企業として広告掲載欄を設けるなど、日頃から地域企業との関係を深めています。

前述のようにプログラムの内容は毎年変えていますが、最終回は必ず「あなたの展望を話そう」と題した共通の企画を実施。講座に参加した人が互いに感想や将来の展望を語り合います。

さらに、ボランティアセンターやファミリーサポートセンター、市の職員、第二層SCを招き、地域での活動にはどのようなものがあるのか、どのような人たちが参加しているのかを紹介。今年度からはフードバンクや学習支援などで実際に活躍しているボランティアも招き、定年退職後地域活動に参加した体験談などを話してもらいました。

単年度の受講に終わらず、その後の継続的な交流や地域活動につなげることが「いるまの男塾」の最終的なねらいです。地域の実情を知る第二層SCからは「地域の担い手となってくれる男性が少なくて困っている」といった課題がかねてからあがっていました。これまで地域との接点が少なかった人にとって、「いるまの男塾」受講が地域活動参加への好機となります。

また、「あなたの展望を話そう」で

（公財）ニッセイ財団 児童・少年の健全育成助成 「2025年度 実践的研究助成」（2025年2月25日締切）

助成金情報

「子どもを巡る『真のウェルビーイング』の探求」をテーマに、現実の家庭・学校・地域社会において、研究成果の社会還元・社会実装を進める研究に対して助成を行います。（詳細は「ニッセイ財団」で検索）

もOBに協力してもらい、受講したことで現在の生活や交流関係にどのような変化が生まれたのかを話してもらいます。こうしてさまざまな人から話を聞くことで、受講者自身の体験と重ね、地域デビューするまでの道筋を明らかにするねらいがあります。

「各地域で活動している第二層SCから直接アプローチしてもらっています。講座受講直後からすでに地域活動に参加される方もいます」と小寺さんは語ります。

OB 同士の緩いつながりが主体的な活動を生む

「いるまの男塾」がOBも巻き込んだ活動へと発展した背景には、どのような工夫があったのでしょうか？「OBの方と協力的な関係を築き、『いるまの男塾』運営に携わっていただくことは、前任者から引き継いだ事項です。4期目を終えた時から一年に一度、これまでの『いるまの男塾』に参加した人たち全員を招くOB会を開いてきました。電話やメール等でもOBとの接点を保ち続けることが大切だと感じています」と小寺さんはいいます。

OB会への参加者は40名ほど。単発の事業で終わらず、受講できたつながりを継続し、拡大していくことが目的です。これほど多くの人が集まってくれるようになったのは、長く続けてきたからこそその成果です。

OB同士の連絡手段について、以前は連絡網を共有していましたが、最近では個人情報保護の観点からグループLINEへと切り替えました。押しつけがましくない、緩いつながりがかえって主体性を引き出しているようです。

2024年度には、「いるまの男塾」OBオリジナルの活動も発足。OB会のなかで「いるまの男塾から枝分かれした団体をつくって活動したい」という声があったため話し合いの機会を設け、それぞれの活動内容を決めました。

例えば歌うのが好きな人たちが集まったグループ「劇団男塾」は、通所型サービスB（住民主体による支援）

や地域包括支援センター主催の介護予防教室などを訪問して歌や演奏を披露。学童保育所で仕事を教えるなどのボランティヤ活動もしています。また、普段から挨拶・声かけができる地域にしていきたいと市民に挨拶をうながす活動の「男塾わはの会」は、「まずは赤い羽根共同募金にボランティヤとして参加してみても」という市社協からの提案で、駅前や商業施設の前で挨拶をしながら募金への協力を求める活動へとつながりました。「学び+楽しむ会」は昼間は狭山茶のおいしい淹れ方をお茶屋さんから学び、夜は宴会にて交流をもちました。小寺さんは枝分かれの活動についても第一層SCとして、訪問先との調整などをサポートしています。

「OBの枝分かれ活動は、いきなり地域デビューするのは気が引ける、という人でも気軽に参加できるサークル活動。OBから自発的に立ち上がった組織なので、私は皆さんの意見を取りまとめ、サポートする役割に徹しています。何か困ったことがあれば互いに助け合える、そんなつながりをこれからも大切にしていきたいと思います」（小寺さん）

人の輪を広げながら、多彩な住民の地域デビューを後押し

これまで市社協や周辺にある施設で開催してきた「いるまの男塾」ですが、ほかの地域でも開催したい、という思いが以前から市社協にはありました。



▲「劇団男塾」の講演

いるまの男塾
地域を知ろう！ 地元で楽しく仲間をつくろう！
*全5回の連続講座です

第1回 9/26(木) 9:30~12:00
「写真で見る身近な町のいまむかし～定点写真撮影のスヌ～」
講師：コヒー監定士 栗澤部 氏
場所：市民活動センター活動室1 講師：博物館 柳津 氏

第2回 10/3(木) 10:00~12:00
「美味しいコーヒー豆の焙煎・淹れ方を講座！とジャズ鑑賞」
講師：入間が文 場所：入間市健康福祉センター

第3回 10/10(木) 11:00~13:00
「男の料理を楽しもう！」
講師：男子厨房に入ろうやまノ瀬 氏

第4回 10/18(金) 10:00~12:00
「少林寺法を学ぼう！」
講師：入間市少林寺法蓮聖 松井 氏

第5回 10/25(金) 10:00~14:00
「あなたの展望を語ろう」
講師：市民活動センター活動室1
ゲスト：フードバンクいるま 学習支援の会
未来づくりのヒントが見つけられましたか？

参加費：1,000円(予定) 第5回回目の昼食代含む
対象：市内在住、地域デビュー(ボランティヤ等)に関心のある方
全5回参加できる方
申し込み：電話かQRコードにて下記期間中にお申込みください！
9月2日(月)～9月13日(金) 9:00～16:00
お問い合わせ：入間市社会福祉協議会 04-2963-1014 担当 小寺
入間市社会福祉協議会

▲2024年度講座(6期生募集)のチラシ

そうした折、市の社会教育課から「市内各所にある地区センターで『いるまの男塾』を開催できないか」と相談が。地区センターの活動を充実させ、地域活動の担い手を増やしていくのが市のねらいです。市社協が「いるまの男塾」を開催する目的とも重なるため、「第二層SCなどにも協力を仰ぎ、次年度から一緒にやっていきたい」と小寺さんはこれからのビジョンを語ります。

小寺さんには、さらに、体が不自由な人、引きこもりがちの人が参加できる講座を開いてみたい、という思いも。小さく始めて少しずつ大きく育ててきた「いるまの男塾」。OBも含めた人の輪の広がり、その可能性はとどまるどころを知りません。



▲コーヒーの焙煎と淹れ方講座

助成金情報

(公財) さわやか福祉財団 「地域助け合い基金」(随時募集)

地域で暮らす人同士の助け合い活動(つながりづくりを目的とした居場所や地域活動を含みます)を対象とし、助け合い活動の開始、維持、発展のため具体的に必要とする額を支援します。(詳細は「さわやか福祉財団」で検索)

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協 VC が若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



國學院大學 観光まちづくり学部
観光まちづくり学科1年生

NPO 法人 SET チェンジメーカー
スタディプログラム (CMSP)
学生スタッフ

こばやし そう
小林 想さん

第23回 岩手県 NPO 法人 SET

団体紹介

東日本大震災を契機に設立された、岩手県陸前高田市を中心に地域住民と若者が協力して「やりたいこと」を実現させる団体。地域おこし実践のチェンジメーカースタディプログラム (CMSP) 等、さまざまな事業を展開する。

地域の人たちと関わり合い要望を叶える この活動が自分自身の成長にもつながっている

陸前高田市で実践する CMSP に参加したきっかけは？

神奈川県出身・在住の私が初めて SET のチェンジメーカースタディプログラム (以下、CMSP) に参加したのは、高校3年生の2月のことでした。

幼少期から絵画を習っており、中学生の頃から筆文字アーティストの父とともに、油絵と書道の親子展を開催していました。その展覧会に偶然来場された SET の学生スタッフが、まちの人のやりたいことと若者のやりたいことを掛け合わせて地域おこしをする CMSP の取り組みを教えてくださいました。旅行でさまざまな土地を訪れるのも好きですし、自分が進学予定だった観光系の学問に役立つと考え、CMSP への参加を決めました。

CMSP は、東京を中心とした学生スタッフが半年間話し合いを重ねた後、陸前高田で1週間、地元の方々とともに「やりたいこと」「あったらいいもの」をつくりあげていきます。最初に参加したのは現地での1週間でしたが、普通の観光では決して得られない、地元の方々と深く関わり合う経験ができました。1週間の共同生活を通じて、メンバーとの居心地の良い関係性や、素の自分でいられる楽しさも味わうことができました。

さまざまな人が参加するなかで 特に気をつけていることは？

4月に大学に進学してからも、より深く活動に関わりたいと思い、SET の学生スタッフに応募しました。

活動では、参加する学生それぞれの得意分野を活かし、異なる視点や考えを受け入れることの大切さを学びました。また、学生がやりたいことと地元の方々为本当に望んでいることを結びつけるように心がけています。これまでに、「地域の方が集まれる場をつくりたい」という学生の想いと、「散歩が好き」「花が好き」という住民の想いを掛け合わせ、みんなが楽しく散歩できるように、散歩用マップや休憩用ベンチをつくったり、散歩コースに花壇を設置したりしました。



休憩用ベンチを設置

自分たちの活動を通じて 得られた発見はありますか？

現地での活動を通じて気づいたのは、地域に若者の力が求められており、若者が大きな役割を果たせるということです。学生と話すことが地域の方々の活力になるようで、自分が初めて参

加したときのことを覚えてくださっていたのがうれしく、陸前高田がさらに好きになりました。最初はただ楽しいという気持ちで参加していましたが、今では新しいことに挑戦し成長できる喜びが、活動を続ける原動力になっています。

SETに入る前は観光で人々を楽しませることに携わりたいと考えていましたが、活動を通じて、そこに暮らす人たちのニーズを知る大切さや、まちなかでもおもしろいことをつくり出し楽しめる可能性に気づきました。これ



参加した地元の方々、学生たちと

からも陸前高田の活性化に取り組んでいきたいです。

ここ、いいね!

自分たちの想いだけではなく、地域住民の「散歩が好き」という想いを大切に、具体的な形に落とし込んだ点が素晴らしいと感じました。深いコミュニケーションを通じて Win-Win の関係を築き、地域活性化だけでなく、自分自身の成長にもつなげている姿勢に共感しました。「楽しい」を原動力に挑戦を続ける姿勢が、多くの人に元気を与えていると思います。

NPO 法人 @ リアス NPO サポートセンター
代表理事

かの じゅんいち
鹿野 順一さん

助成金情報

(一財) サウンドハウスこどものみらい財団 助成金 (随時募集)

苦しんでいる子どもたちの生活を援助する取り組みを支援します。子どもの命を守る事業の運営に関わり、心と体を癒す居場所づくりに寄与する事業や被虐待児の経験をもつ人たちの心のケアに取り組む事業等が対象です。(詳細は「サウンドハウスこどものみらい財団」で検索)

「聴くこと、伝えること」を考える

第11回

「わからない」と「わかる」



福祉ジャーナリスト
まちなが とし お
町永 俊雄さん

この社会をいつも「福祉とは」とか「ボランティアとは」といった大枠から考えるだけでなく、自分に引きつけて考えてみてはどうでしょう。でも、どうすればいいのか戸惑いますね。そこで、誰もが備えている「聴くこと、伝える」ことから考えてみます。

「聴くこと、伝えること」を改めてとらえ直す、それはこの社会への新鮮な視点になり、何より自分の発見にもつながるはず。 「聴くこと、伝えること」こそが、あなた自身の確かな福祉力を生み出す、そう思っています。

1947年東京都生まれ。1971年NHK入局。「おはようジャーナル」キャスターとして教育、健康、福祉といった生活に関わる情報番組を担当。2004年からは「福祉ネットワーク」キャスターとして、うつ、認知症、自殺対策などの現代の福祉をテーマに、共生社会のあり方をめぐり各地でシンポジウムを開催。2011年からフリーの福祉ジャーナリストとして活動を続けている。全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター運営委員、広報委員も務める。

「聴くこと、伝えること」は暮らしの日常を成り立たせる生き生きとした私たちの福祉活動です。私たちの日常に行き交う聴くことや語りかけることは、そのまま生きることの力になっています。ただ、「聴くこと、伝えること」というのは単に素晴らしい機能というわけにはいきません。その機能を情報の伝達ととらえれば、なかなか難しいところがあります。

「伝言ゲーム」をご存知だと思います。ひとつの情報を次々に伝言していくうちに必ずのようにズレていき、時にはまったく別の情報になったりします。それはなぜか。性格や価値観の違い生身の人間が介在するからです。デジタルの情報とちがひ、そこにアナログの伝え手と聴き手がいて、そこに口調や表情が加わって、情報が生き生きすることもあればまったく違った情報にもなって伝わります。このことをどう考えればいいのでしょうか。だからメールでしっかりと伝える、というのが今の実務的な回答かもしれません。ネットでの情報伝達とは違うのが、私たちの「聴くこと、伝えること」なのです。

そこには、人間同士の意思疎通の難しさと可能性の双方があります。想いを伝えることは励ますこともあれば、時に思わぬ形で相手を傷つけてしまうこともあります。しかし、だからこそ、私たちの「聴き、伝える」が必要なのです。

「聴くこと、伝えること」をコミュニケーションと考えてみればわかりやすいでしょう。コミュニケーションとは何のためにあるのでしょうか。相互理解、わかりあうためという解釈があります。となれば、一歩押し進めて、人は自分以外の他者を本当にわかりあえるものなのでしょうか。さらに踏み込んで、果たして自分は自分自身をわかっているのかと自問すれば、どうもあやふやになります。私はむしろ、わからないことを確認することが大切だと思っています。自分をわからないのであれば、それ以上に他者はわかるはずはないではありませんか。

わかり得ない他者と出会うことは、こちらを不安定にします。ですが、相手をわからないとする自分がいること、それはそのまま自分を検証することにつながります。相手をわかり得ないとすることによって初めて、他者に出会うのです。「わかり得ない他者」がいることを「わかる」、つまり認めることが極めて大切なのだ、私は思っています。

誰もが経験する反抗期、親に向かって「父さんに、オレのことがわかるはずがない！」と叫ぶ時、実はその叫びで、それまで自分でもわからなかった自分を発見するのです。親にはわかり得ない自分を見つめ、自我を抱きしめるのです。親をわかり得ない他者とし

てみつめること、それはそれまで親の庇護の翼に守られてきたか弱いヒナの自立です。それが成長というプロセスです。

共生社会が言われています。共生するというのは同質均質の仲良しクラブではありません。「ともに生きるコミュニティ」を共生の本義とするためには、わかりあえるというより、わかり得ないという前提に立つことが必要だと私は思っています。私たちは最短の時間でわかろうとしすぎです。

と、ここまで語ると、「エ〜、わかり得ないなんてえ、悲しすぎませんか」とか言われそうです。そうですね。わかりあえた方がいいですよ。でもね、だからこそ、わかり得ないと思いつめることを前提にしたいのです。

恋人同士だとか、長年連れ添った配偶者同士であっても、完全にわかりあえるものなのでしょうか。愛情表現として「わかりあうふたり」とするのは勝手ですが、本来はわかり得ない中だからこそ、際限なく語り合い、耳を傾け、つながろうとするのです。わかり得ないことの前提でともに創り上げる関係を、「愛すること」と言います。

それを私たちは育てることができません。それは共同体を創ることであり、そこにあるのが確かな「聴くことと伝える社会」です。

書籍紹介

『月刊福祉』2025年3月号(全社協出版部) 価格1,170円(本体1,064円)

特集は、「権利擁護支援を地域で行き届かせる一成年後見制度の見直しを見据えて」。認知症や身寄りのない高齢者の増加、障害者の地域移行の推進等もあり、地域に権利擁護支援が必要な人はさらに増えると見込まれるいま、この先の状況を見据えて必要な見直しを提起します。

地域支え合いセンター

ってどんなところ？

～立ち上げ時の課題を知る～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第5回 長野県 長野県社会福祉協議会

見守りの継続とコミュニティの再生にセンターは有意義



長野県社協まちづくり
ボランティアセンター
主査
やまざき ひろゆき
山崎 博之さん

センターの立ち上げが難しかった市町には
県センターがバックアップ

2019（令和元）年10月に台風19号が発生。長野県内では千曲川の堤防が決壊し、死者24名（災害関連死を含む）、住宅全壊・半壊が3,400棟を超える被害があり、その流域にある11の市町村が災害ボランティアセンターを設置しました。長野県社会福祉協議会（以下、県社協）では、災害ボランティアセンターの運営支援と並行して、速やかに被災者見守り・相談支援等事業が実施できるよう、推進チームを設置しました。推進チームは、被災市町村での個別訪問などを実施。被災から2か月後の12月に、被災者の見守り支援、被災地のコミュニティ再生等を目的とした「長野県生活支援・地域ささえあいセンター」（以下、県センター）がスタート。以降、長野市、中野市、飯山市、佐久穂町で地域ささえあいセンター（以下、センター）が開設しました。

当時、センターを立ち上げなかった市町もあります。新しい仕組みに取り組む困難さ、人を雇用することへの躊躇が開設へのハードルになっていたようです。そうした地域には、県センターがバックアップしながら、地元の社協等を中心に見守りを継続。重点エリアに設けた拠点「千曲川広域支援サテライト」の職員が市町社協をフォローしました。

毎月の会議で関係者が
ケース検討や支援状況を共有

センターには生活支援相談員が配置され、建設型仮設住宅、みなし仮設住宅、公営住宅、在宅に加え、親族宅や施設入所等を避難先とする合計1,424世帯を支援しました。毎月、行政（福祉・住宅等の部署）、

地域包括支援センター、市町社協等とともに判定会議を行い、ケース検討と支援状況を共有しました。

この時、世帯ごとに生活支援と住宅再建支援を整理する「再建支援区分」と併せて、一人ひとりの生活状況に応じて見守り頻度を決めていく「見守り区分」を重視したことにより、継続的に被災者に寄り添い、行政や専門機関と連携した支援に結び付けました。

ささえあいセンターは必須と実感
継続的な見守りやコミュニティの再生へ

センターを開設し運営するうえでの課題のひとつに、人材の確保があります。これについては民生委員のOBを中心に雇用しながら、専門職の方も非常勤として配置されました。それぞれ住民の立場と福祉専門職の立場を活かしながら、支援の経過のなかで、横断的な体制を組めたのは結果的によかったと思います。

もうひとつの課題は、センターの有無による差です。センターを開設しなかった市町で継続的な見守りが不足してしまったことは否めません。2年後にみなし仮設住宅の供与期間が終わるタイミングの際に、住まいが決まっていない被災者が少なくないといった状況を正確に把握できていませんでした。また、コミュニティの再生についても、センターの有無によって差が生まれた実感があります。振り返ってみると、センターがある市町では地域住民の意向が把握できていたので、センター開設の意義が顕在化したといえます。このようなことから、ある程度の大規模災害となった場合、地域ささえあいセンターは必置にすべきだと考えています。



住民主体の実行委員会をサポート
「追悼と復興のつどい」

インフォメーション

社協VCのためのオンラインサロンを開催します

～各地の取り組みを知り、話し合おう！～

全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター（全社協VC）は、各社協ボランティアセンター（VC）の機能強化の参考になるよう、取り組み事例の紹介と情報交換を行う連続オンラインサロンを令和7年度から開催します。その

KICK-OFF回として、3月4日（火）10:00～12:00に「VCの未来を語る」をテーマにした鼎談を行います。

詳細は各都道府県・指定都市社協を通じたご案内をご覧ください。